

30. 草津市志那中遺跡の 井戸 2 例

本遺跡は、草津市の西、琵琶湖に近い水田中に所在し、従来より弥生土器や布目瓦の出土が報じられ、弥生～平安の複合遺跡として知られていた(注1)。昭和52年度のは場整備事業に関連して事前調査を実施したところ、弥生～室町期の井戸・土坑・溝・掘立柱建物が多数検出された。このうち、井戸の検出は8基にのぼり、時代も弥生～室町の各時期にわたるほか、その構造もバラエティに富むなど注目すべき内容をもっている。ここでは、そのうち弥生中期の一括遺物を出土したSE-5と、完形の漆器椀と土師器小皿・羽釜を出土したSE-6の2例を紹介したい。(※)

(1) SE-5

〈遺構〉

KT3トレンチのやや南寄りで検出された直径0.8m深さ1.0mを測る円形素掘りの井戸である。地山Ⅰの黄褐色粘質土層より掘り込まれて、地山Ⅲの灰黒色粘土層中にその底部を置く。地山Ⅱは青灰色砂層であり湧水がみられ、放置すれば地山Ⅰまで完全に水没する。覆土は、上部を計測できなかったが、①黒灰褐色粘質土層、②黒灰色泥土層、③灰黒色粘土層、④黒色腐植土層の4層からなる。遺物は、①・②両層で検出され、②層でおびただしいものがある。②層は腐植土の薄い層状介入がみられ、着柄鋤(PW16)出土直下には径2～3cmの円礫が散布していた。③層は地山Ⅱと同色同質であり、無遺物かつ堅緻な層である。おそらく、④層の腐植土が堆積した後、地山Ⅱが一瞬大幅に崩れ落ちて形成された層であろう。

集落とりわけ居住域において、こうした井戸の占める位置は注目されるが、狭長なトレンチ調査でもあり、同期の遺構として南東で数例の土坑を確認したに留まった。(※※)

〈遺物〉

②層より、畿内第4様式(中期後半)に並行すると思われる弥生土器一括と着柄鋤1点の出土をみた。

壺A(E1) 頸部はゆるく外反し、口縁部へとつづき、頸部外面にへら状工具による斜線文帯をめぐら



第1図 位置図

す。内面指押え。内外面ハケ目調整。淡褐色。

壺B(E2～E3) 頸部は短かく、口縁部は大きく外反してほぼ水平になり端部を上下に若干広げる。内外面ハケ目調整。外面に指押え痕を残すものもある。灰白色。

壺底部(E4～E5) E4はやや上げ底気味、E5は平底を呈し、いずれも体部は底部より直線的に斜方向に立ち上がる。内外面にハケ目調整を施し薄手で、E4は有孔鉢の可能性ある。淡褐色。

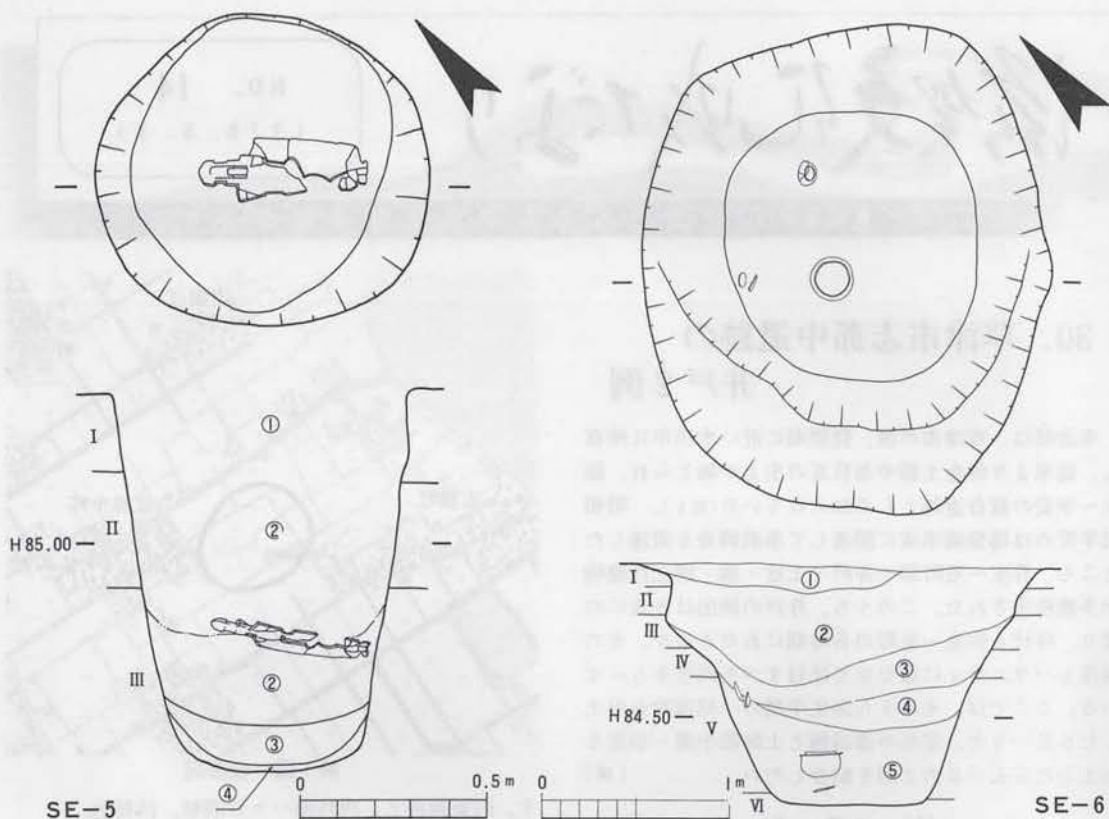
無頸壺(E6) 体部はゆるやかに内湾し、口縁部は丸く内曲する。内外面ハケ目調整、口縁から体部にかけて6条の凹線文を施す。淡赤褐色。

甕A(E7～E9) 頸部は大きく外反し、口縁部は端部をほぼ垂直に立ち上がらせ、受口状を呈する。内外面に粗いハケ目を施し、受け部内面に刺突列点文(E7)や刻み目(E8)をめぐらせる。淡褐色。

甕B(E11) 口頸部は大きく外反し、口縁部は短かく収め、体部はほぼ直線的に下方にのびる。内外面に粗いハケ目を施し、口縁端部に刻目、頸部および体部上半に刺突列点文・凹線文をめぐらす。暗褐色。

甕C(E12～E13) 頸部は「く」の字型に短かく外反し、口縁端部は上下にやや広がる。体部はゆるやかに内湾する。内外面ナデ調整。淡褐色。

甕底部(E10) 安定した平底で、体部はやや外反気味に上方へのびる。外面へら削り。内面指押え。暗褐色。



第2図 遺構図

高杯 (E14) 坏部口縁は大きく外反し、端部はやや外方に垂下する。口縁内側に1条の突帯をめぐらし、垂下した口縁端部には2条の凹線がめぐる。内外面ナデ調整。淡赤褐色。

高杯脚部 (E15) 中空裾開きの脚部で柱状部と裾部の区分は不明瞭。内面にしぼり目が残る。淡赤褐色。(※)

着柄鋤 (PW16) 本例は、鋤身と柄を別木でつくる着柄鋤の一形態をなすもので、鋤身のみ遺存していた。最大長47.4cm、最大幅19.6cmを測り、材質はカシである。鋤身は湾曲して匙形をなし、中央には表から裏面に抜ける斜めの1孔が穿たれ、楔と思われる木片が挿入されていた。楔は、柄を鋤身に装着する際打ち込んだものと考えられ、鋤身の一端を削り出してつくられた鉤形の突起とともに柄の緊縛に効力を発揮したであろう。この場合鋤身と柄は、おそらく一直線というよりもやや鈍角気味に装着されていたと思われる。

弥生時代の当初より、農耕具は機能や用途に応じて各種の形態のものを含んでいたことが知られているが(注2)、当時の水稻農耕における技術経験および社会関係の未発達は、農耕の対象を湿田ないし半湿田経営に限定しており、必然的に排水作業を必要不可欠の重要な一工程としたであろう。本例のような着柄鋤は、

こうした排水用の溝をきるのに最も適した形態を保っており、おそらくは、そうした用途に供されていたであろうと思われる。湖東平野の一部では、本例の発展形態と思われる「江州鋤」が、長い歴史を秘めて現在なお使用されているのを見ることができる。(※※)

(2) SE-6

〈遺構〉

KT4トレンチ北端近くで検出された直径2.5m前後、深さ1.3mの不整円形をなす素掘りの井戸である。南西側はテラス部が設けられて、二段掘りの様相を呈している。現在は地山Ⅰの黄褐色粘質土層に掘り込まれて、地山Ⅵの灰白色砂層中にその底部を置く。地山Ⅳは湧水の砂層であり、現状でも放置すれば、地山Ⅱ層まで水没することが知られた。覆土は、①黒褐色粘質土層、②灰白色泥土層、③淡黒灰色泥土層、④灰色泥土層、⑤黒灰色泥土層の5層からなり、③層では、広葉樹の葉を主体とする腐植土が数条にわたって層状に介入し、若干の土器片(土師器)と共に曲物底部、竹片などが出土した。⑤層でも腐植土の層状介入がみられ、羽釜(B1)、土師器小皿(H1)、漆塗花卉文付椀(W1)を始め、数点の曲物底部を検出した。

また、①層には地山Ⅰの、②層には地山Ⅱのプロッ

ク状混入が著しく、軟質地盤での素掘り井戸が、比較的短期間に埋没したことを想起させる。上部の付属施設である井桁、排水溝、覆屋などは、確認されなかった。(※※)

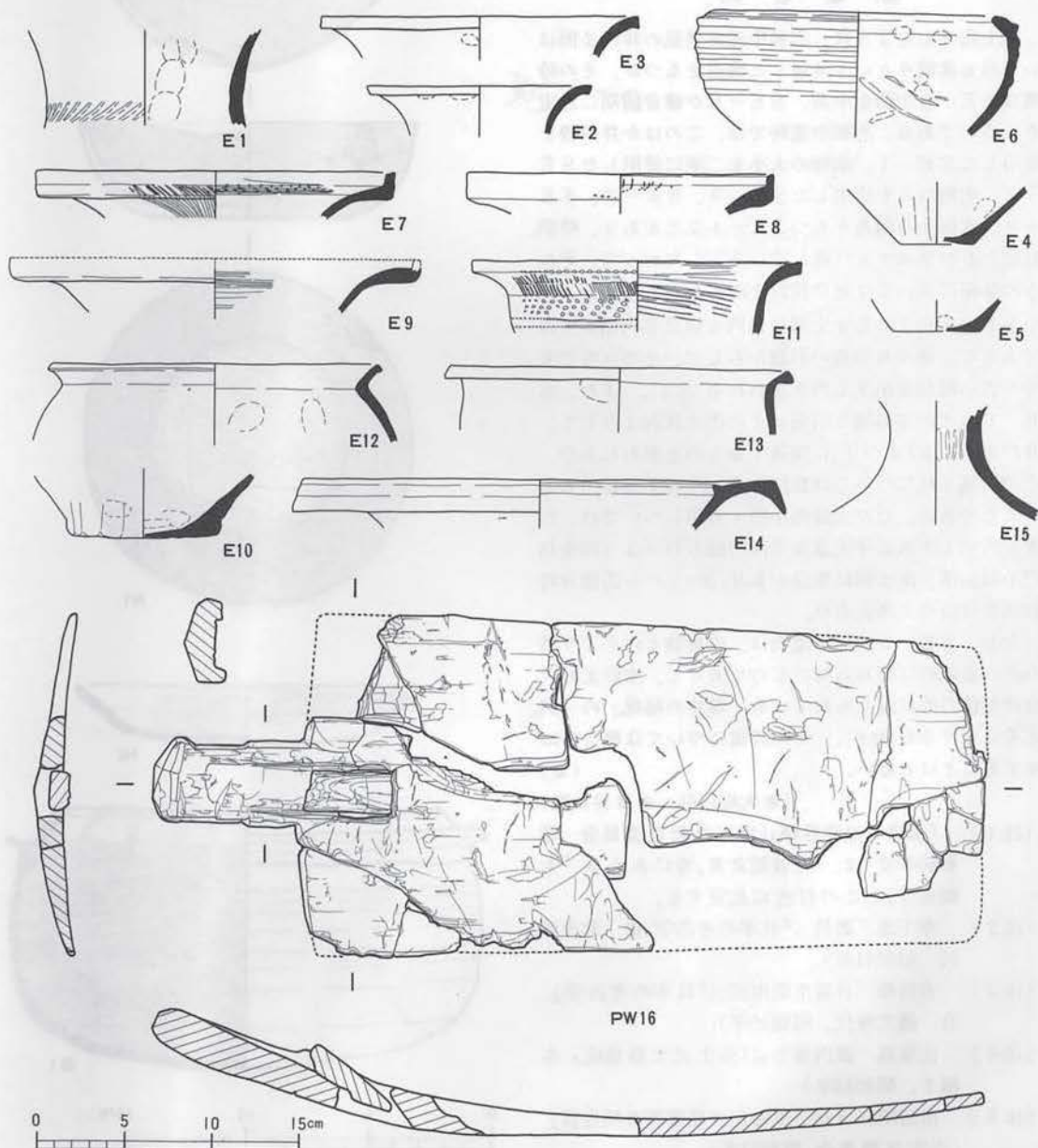
〈遺物〉

羽釜 (B1) 口縁部は短かく内傾して立ちあがり、つばも短かく上方にのびる。体部はゆるやかに内湾しつつ底部に到り、やや下ぶくれの階円形を呈する。口縁部内外はナデにより調整され、内面はハケ状工具により調整される。いわゆる黒色土器A類で、外面にススが付着し、底部に意識的と思われる八角の穴が穿た

れている。

皿 (H1) 口縁部は直線的に外上方にのび、端部はやや内反して丸くおさめている。底部はほぼ平底を呈す。粘土板成形で内外面に指圧痕が残り、口縁内外には強いナデがみとめられる。淡黄褐色。(※)

漆塗花卉文付椀 (W1) 平底の高台をわずかに削り出した木製の椀である。高台底面は木肌が露呈するが、内外面とも黒漆を塗り、さらに、赤漆による華麗な花卉文が描かれている。花卉文は、外側面に2例、内側面に4例、底内面に1例を配している。漆塗りの技術は縄文時代晩期にまでその存在をさかのぼり得る(注



第3図 SE-5出土遺物

3)、4,000年以上の歴史を持つといわれる中国のそれが新たに導入されて、既に相当高度な技術が獲得されるに至っていたものと考えられる。また、内面では幅0.4cm前後を測る同心円状の削痕が確認でき、ロクロの巧みな使用が想定された。こうした漆塗りやロクロにみる高度な技術は、社会的分業体制の一端を担う専門工人集団の存在を彷彿させて興味深い。

口縁部の直径13.8cm、器高4.0cmを測り、材質はケヤキと思われる。他の伴出遺物から考えて、鎌倉時代後半の所産と解されよう。(※※)

(3) ま と め

以上紹介したように、志那中遺跡発見の井戸2例はいずれも素掘りという共通した構造をもつが、その時期はSE-5が弥生中期、SE-6が鎌倉前期に比定されるのである。志那中遺跡では、このほか井戸枠を使用したSE-1、曲物の大小を二重に使用したSE-2、曲物のみを使用したSE-3、SE-7、SE-8、素掘りの構造をもつSE-4などがあり、時期、形態ともバラエティに富んでいる。したがって、それらの詳細については更に検討を加えたいと考える。

SE-5出土の弥生土器は畿内4様式並行期のものであるが、甕や無頸壺の形態からして、そのうちでもやや古い様相を示すものと思われる(注4)。また、SE-6出土の漆器椀と羽釜はその出土状況よりして、井戸をめぐる「まつり」に関連するものと思われるが、その所属年代については類例に乏しく若干問題のあるところである。ただ土師器小皿・羽釜については、13世紀前半とされる平安京藤原国明邸SD-3(四条坊門小路南溝)出土例に類品があり(注5)、一応鎌倉時代後半の所産と考えたい。

なお、SE-6の出土遺物は、廃棄物というより明らかに意識的に埋められたものであって、水野正好氏が近年精力的に論じられている「埋井の秘呪」の一例と考えられるが(注6)、その詳細については報告書にゆずることにしたい。(※)

(※大橋信弥 ※※谷口徹)

(注1) 『滋賀県遺跡目録』(滋賀県教育委員会 昭和40年度)は、『正倉院文書』等にみえる「大般若寺」をこの付近に比定する。

(注2) 木下忠「農具」(『日本の考古学』Ⅲ 弥生時代 昭和41年)

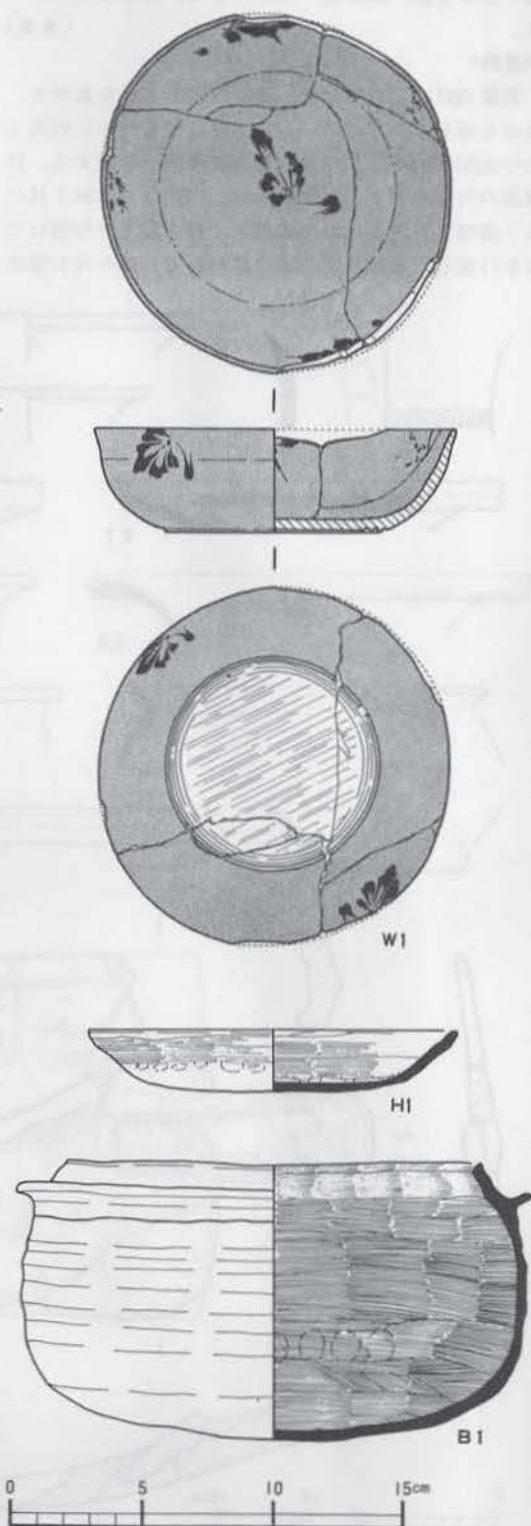
(注3) 吉田格「日常生活用具」(『日本の考古学』Ⅱ 縄文時代、昭和40年)

(注4) 佐原真「畿内地方」(『弥生式土器集成』本編2、昭和43年)

(注5) 田辺昭三ほか『平安京跡発掘調査報告書』(平安京調査会、昭和51年)

(注6) 水野正好「竹筒をのこした一井とその秘呪」

「金貴大徳の呪句と埋井の呪儀」(『草戸千軒』36号・58号 昭和51年、昭和53年)



第4図 SE-6出土遺物